各現場が乗り越えるべき問題とは?

特別講演

第一線で活躍する識者が現在の施設で起こっている状況についてレクチャー。withコロナや、ICTの活用や介護DXの導入など、環境変化への対応が迫られている介護経営の今や未来について語った。

居心地のいい現場を作り生産性を高めることが大事

介護福祉に従事する管理者やリーダー層などに向けて行われた特別講演。各施設などの今後のあるべき姿について語った。

❶本間秀司氏

医療法人や社会福祉法人などへのコンサルティングを行っている本間氏は、「特別養護老人ホームの経営力強化」をテーマに講演。

特養の経営力強化を考える際に「各都道府県の第8次医療計画（'24～'29年）の変化が引き金を引く」ことを頭に入れておくことが大事、2年ごとの診療報酬改定に一喜一憂する病院関係者が多いが、もっと全体を見る必要があると伝えた。

少子高齢社会になることから病院も今ほど数が必要なくなる現状を紹介。医療法人が生き残ろうとする中、社会福祉法人である特養は職員が奪われないようにどうするかが大事で、その答えは働き手にとっての居心地の良さを重視するという当たり前のことにあると説明。「働きやすい場所を提供して信頼関係を高める〝エンゲージメント経営〟の大切さ」について改めて見直しながら、人材確保するための「管理職教育」と「次世代教育」の2本柱に注目して、法人の最大の弱点である人材不足に目を向けることが勝ち残る条件と語った。

働き手にとって特養がよりよい場所になるには収益改善が必要だが、特養のみの事業だと2～3年で定員割れ、6年ほどで赤字に転落する可能性がある施設も多い。そのような状況下で増収に転じることができる細かい例を挙げ、黒字経営の目指し方を示唆。今後は、「財務・事業計画・償却・管理会計・マーケティング」を一体管理していく経営の必要性を説いた。

❶

「特別養護老人ホームの経営力強化
～2040年に勝ち残る特養の条件を考える～」
本間秀司（ウェルフェアー・J・ユナイテッド株式会社）

❷鎌田大啓氏

デイサービス事業継続などの相談支援事業を含む、生産性の向上を目指す介護サービスを提供している鎌田氏は「デイサービスの生き残り戦略としての生産性向上の取り組み」について講演。

稼働率も回復しつつあるデイサービスは、独自性を持っているかが大切に。そこで必要なのは「人材の確保」と「育成」、離職率の高い介護現場の「イメージ改善」。これができれば利用者から満足度が得られ、高い収益が望める生産性の向上がみられる現場に変化する。まず良い人材を確保していくためには、経営者が今、現場で起きていることを把握することが大事。現場職員に活動を振り返るチェックシートを用いてトライ&エラーを繰り返しながら細かい改善をしていくことが近道となっていく。

現在、地域と密着しているデイサービスは「自立支援」「介護予防」「健康寿命延伸」のサービスを提供するなど総合事業を展開していくことができる場所。そのような可能性があふれるデイサービスの経営を黒字で続けていくには、地域包括ケアの輪の中に入り地域とのつながりを多くする営業努力も必要となってくると語った。

❸山口晴保氏

認知症研究の普及や介護予防などを行っている認知症介護研究・研修東京センターの山口氏は、「認知症ケアに係る評価について」を講演。施設系サービスや移住系サービスで問題となる、認知症に対する一つの尺度を展開した。

認知症は、定量的な評価尺度がないため、介護職員もどのようなサービスを行うか悩むことが多い。そこで、「認知症状（中核症状）」「神経症状」「生活障害」「BPSD」「全身状態や内服薬」に注目した客観的な評価ができるチェックシートを紹介。さまざまな側面から症状を確認し、トータル的に現状を把握していく方法について語った。

客観的評価ができるようになることで、ケアの方法が具体的に立てられることに。また数値化することで、ケアの効果も可視化され職員のモチベーションもアップすることができたという。ただあくまでも一つの尺度なので、現場の話し合いが大事とのこと。客観的に認知症を把握し、現場で協力しながらケアする必要性を説いた。

❷

「デイサービスの生き残り戦略としての
生産性向上の取り組み」
鎌田大啓（株式会社TRAPE）